

れており、結婚というバスに乗り遅れることは若い女性とその家族にとって大問題であった。また結婚前の男女が交際することや性関係をもつことにたいしても厳しいまなざしが向けられたため、知り合った二人が交際期間が短いまま結婚するというケースも多かった。

### ↓ ジェンダー化された家族

このような家族は、家長の許しを得なければ結婚できないということもなく、かならず親と同居して彼らの世話をしなければならないということもない、夫婦中心の新しい家族であった。しかし一方で、男性が職業をもち収入を得ることで家計を支え、妻は収入のともなう仕事はせずに家事や育児をするという家庭内の業務分担（性別役割分業）が行われる、ジェンダー化された家族でもあった。

このようなあり方は現在まで続いている。生活時間調査等では、妻の家事・育児時間は、子どもの有無や子どもの年齢によって変わるものの、四時間～七時間程度と長時間にわたり、夫のそれはおおむね三〇分強である。育児期のカップルが家事や育児のどの部分を担っているか具体的に調べた調査では、献立の立案、材料の調達から調理、後片づけ、余った材料の管理など、工程が複雑で時間の制約を受けやすい炊事は、専業主婦であろうとフルタイム共働きの妻であろうとほとんどすべて女性が行っていた。男性が行う家事はリビングの掃除機がけや、衣類の選別なしで行う洗濯や乾いた洗濯物の取りこみなど、短時間で行える家事に限られていた。また子育てについても、妻によって準備が整えられた状態での保育園への送迎や、子どもの短時間の遊び相手、あるいは妻も含め一緒にレジャーに出かけることなどが

Question 2 continues...

男性の育児とみなされており、妻による全般的なマネジメントがあつたうえでの「分担」であることが明らかになっている（藤田 二〇一〇）。

では女性たちは、夫の協力が見込めないまま、子どもが幼く家事や育児が大変な時期をどのように切り抜けてきたのであろうか。親はいつの時代も育児の有力なサポート源であるが、同居や近居する親だけではなく、かつては子どものいるきょうだい同士が互いの子育てを助け合うことも多かった。さらに女性の多くが結婚し主婦となつて子育てをしていたため、住宅街の公園は、子連れのお母さんや子どもたちでいっぱい、地域においても子育てのサポートネットワークが築きやすい状況にあつた。

しかし、現在では、後述するように未婚化・晩婚化が進み子どもの数も減っている。子育てを担う親たち、とくに都市部に住む親の多くは、親以外の有効なサポート源をなかなか見つけられず、かつてより孤立しがちな環境での育児を強いられている。

FUJITA KAYOKO, 'Kazoku suru', *Jendā de manabu shakaigaku* (Sekaishisōsha, 2015), pp.113-116.

(TURN OVER)

## Vocabulary (Question 2)

ここぞ	important time, moment
しつけ	child-rearing
官吏	public servant
おかみさん	wife
かたわら	on the side, in addition to
もっぱら	exclusively
階級	class (e.g. middle class)
家制度	family system
意向	intention
見合い結婚	arranged marriage
生涯	one's lifetime
家長	patriarch
炊事	cooking
工程	work process
切り抜ける	to cope, get through

Question 2 continues...

1. Describe the image of family as portrayed in commercials. **[4 marks of 35]**
2. When did the modern family become the majority? Describe what many families other than modern families were like before then. **[7 marks of 35]**
3. In the context of post-war society, what does the author add in relation to the tendency for women to marry during their marriageable age? **[7 marks of 35]**
4. What does the author mean by 「ジェンダー化された家族」? **[4 marks of 35]**
5. In the surveys, how much time do mothers and fathers spend on childcare and housework? How is child-rearing organised between husbands and wives? **[8 marks of 35]**
6. Aside from the support of their own parents, how have mothers in the past coped during times when their childcare and housework burdens become difficult? **[5 marks of 35]**

(TURN OVER)

Section C

(3) Translate **ONE** of the two following passages from **seen** texts into English [30 marks].

Passage A

1  
馬

背中が痒いと思ったら、夜が少しばかり食い込んでいたのだった。

まだ黄昏時なのだが、背中のあたりに暗がりが集まってしまったらしく、密度が濃くなったその暗がりの塊が、背中に接着し、接着面の一部が食い込んでいたのだった。

振ったり揺らしたりしたが、夜は離れない。手で剥がそうとしても、実体を持たないふらふらしたものなので、掴みどころがなくて困る。いちばん濃い暗がりの部分を捕らえた、と思っても、見る間に暗がりは拡散していき、違う部分がこんどは濃くなってしまったりする。

そのうちに痒くてたまらなくなってきた。ぱりぱりと背中を掻いた。掻けば掻くほど、暗がりは背中に食い込み、食い込めば食い込むほど、痒くなる。堪らなくなつて駆けだした。

駆けてみると、馬のような速さである。夜が食い込むと、なるほどこのように速くなるのかと感心しながら駆けた。道や歩く人や看板が、電車の窓から見る風景のように遠ざかる。

しばらく走っていたが、じきに飽きて止まった。馬のように体から湯気が立ちのぼった。鼻息も荒い。立ちのぼる湯気の中に、夜の暗がりが混じっているらしく、まわりを取り巻く空気が曖昧になる。何人かの人が遠巻きに眺めている。珍しいものを見るような様子で眺めている。

Question 3 passage A continues...

鼻息の中にも暗がり混じり、吐き出されて暗い筋をつくって、どこまでも伸びていく。息を吐くと、筋は少し伸び、吸うと鼻に近い部分がいつたん鼻に吸い込まれる。再び吐くとまた少し伸び、そうやって、暗がりは鼻に生えた紐のような綱のようなものになって伸びつづけた。

眺めている人のうちの一人が「いいものを見たねえ」と言って手を叩いた。ぽんぽんと、池の鯉を呼ぶような叩き方をした。他の見物人たちも倣<sup>なま</sup>って手を叩く。突然腹がたった。こら、と、叫ぼうとした。

叫ぼうとして声が出ないことに気がついた。こら、の、こ、が出ない。鼻息を荒くして、こ、こ、といきむが、鼻息がますます荒くなるばかりである。見物人は喜びさらに手を叩く。

あんまり腹がたって、飛び上がった。飛び上がりながら声をはりあげると、いなくなになった。馬のいなくなになった。そのままどこかの屋根の上まで飛んで、さかんにいなくないた。下で見物人たちが手を叩いている。叩く音に負けないよう、何度でもないないた。からだも馬になり、全身は黒い毛に覆われた。

「夜が始まるよ。夜の馬が来たよ」

さきほど最初に手を叩いた見物人らしき者が言い、それと共に体から噴き出す湯気は勢いを増し、暗がりは広がっていった。

得意になって、何回でもないないた。いなくなたびに、闇が濃くなっていった。

KAWAKAMI HIROMI. *Hebi o fumu* (Bungei shunjū, 1999), pp.110-111.

(TURN OVER)

Passage B

坂道である。

この町では傾いた道を全て「坂」という。

石段ですら、勾配が急すぎるので便宜上そこに段をつけたにすぎないというのである。

桜町の電車の停留所から筑後町へ突き当たるまでの坂道を隆之はこのところよく歩く。

五月に入れば長崎はもう初夏といってもよい季候で、晴れた日に気温が二十五度を超える日があつても驚くことはない。坂の途中、中町公園の周囲には夾竹桃の植え込みがあつて、まだ花には早い、陽が高くなるとその葉影がアスファルトにくっきりと写る。今日は風もなく、その葉影はさやとも揺れない。

目の前を母の聡子が歩いている。

「かあさん」と呼びかける。

「大丈夫ね、そげん、急がんとよ」

今年六十三歳になった母はまだまだ足は達者だ。立ち止まって振り返ると、笑いながら「なあーんも」と静かに応えた。

Question 3 passage B continues...

突き当たりの角になじみの小さな商店がある。

こういう店を一体なに屋というのか分からないが、ちょっとした果物から花、冷たい飲み物や蠟燭ろうそくに線香に雑誌、駄菓子まで商っている。まあ、雑貨屋の一つだろう。墓参の折にはいつもこの店で花と線香を購あがなった。

筑後町一帯は古くから寺院が多く、おそらくこの商店はその墓参客を対象として生きながらえてきたのではないかと隆之は思っている。

その店で母は深い紫色の玉アザミを二束と、名前の分からない黄色の小さな菊を二束、それからやはり菊科の赤や白の混ざった葉の多い小ぶりの花を二束選んだ。そしていつものように線香を二袋、燐寸マッテも一箱、それらを新聞紙にくるんでくれるように頼んだ。

「温ぬくうなりましたね」店の女主人は穏やかに笑いながら、それらの束を大きなパラフィンの袋にまとめて入れ直し、隆之に手渡しながら「毎度ありがとうございます。二千三百円になります」と言った。

SADA MASASHI, Gege (Gentosha, 2003), pp.7-8.

END OF PAPER